し私はそんな宗教は信じてゐない。私は強い生命の宗教を信ずる。それが淘汰の力となつて、恋愛の中に人間を引きあげて行くのだと思ふ。『性』の宗教が高調せられて、それが人種改良学者の間に八釜敷云はれてゐるのは、この生命宗教に外ならない。

パンを抛つことは出来よう。然し生命をなげうつことは出来ない。愛と恋とは永遠に生命の内容を形造る。そして、生命は淘汰の力としての恋愛によつて、自らを人類に示現する。神なくして真正の恋は無い。恋による新生の道は永遠に神の道を歩く。

（一九二二・一一）

人格を表現する生活

――境遇とその支配――

（一）

境遇とその支配に就ては、震災後の東京に出来たバラック生活を見ても、いろ〳〵な問題を吾々は考へさせられる。すべて心理学の法則からいへば、実現（レアリゼーション）されたものには或境界（スファイア）があり識域がある。それから以上にても不可だし、以下にても不可だといふ丁度の境界といふものがある。そこに確かな人間生活に触れることができる。この点から云へば、細民生活の研究といふものは、人間の生活の全体としての圧搾したものを研究することになる。吾々はバラックを訪問して、単に罹災者の生活を見るといふのではなく、自分自身の生活の一部分を見るのである。それは吾々の生きる社会の反映であり、簡単にされたものであり、コンデンスされたものであると解しなければならぬ。

さて私は、このバラック生活を通じて、吾々の物質並に精神生活、吾々の社会、吾々の時代といふものについて観察して見よう。先づ第一に住宅の感化といふことである。その住宅を構成する石、木、セメントは、単なる石、木、セメントでなくて、吾々個人に深い感化を与へる有機的関係に立つことを十分に知らねばならない。家は木と鉄と石とセメントを結合し、寒さ暑さに程よき調節や防備を与へてくれるのみのものと解するのは大なる誤りである。寧ろ吾々はその一本の柱から、若しくはその打ち込まれた一本の釘を通して、この家を作つた人の心に触れ、感化され、影響を受けることが如何に切実であらうか。若しそこに少しでも手落ちがあつたり、胡魔化しのあつた場合には、家は直に吾々に叫びかけるであらう。嘗て英国の文豪ジョン・ラスキンが伊太利の旅にある時ヴェニスの建築物を視察するために出かけたが、たま〳〵烈しい夕立に出会ひ、余儀なく雨を或る寺院の廊下（ポーチ）に避けたが、ふと見れば、チントレットの壁画が折柄の雨洩のために濡れてゐるではないか。幾百万円を投じても再び得られない中世紀のこの名画が、この夕立のために濡れてゐるのを見たラスキンはどんなに驚いたであらう。雨の上るのを待つてラスキンは早速注意して検べさせると、その雨漏の所は、セメントで詰める所へ簡単に土を詰め込んであつたことを知つたのである。建築は物をいふ。粗雑な手ぬかりな建築はすぐ反逆を試みる。

文芸復興期（ルネサンス）の美術は、古代ローマ、ギリシヤの様式を取入れて新しい時代を作つたが、その末期に及んで、ルネッサンスは徒らに形

式美の過重となつた。かくて様式は見事に古代に模することができても、しかしそこにはこれに伴ふ精神が少しも充実されてゐなかつた。単なる建築の形式美のみが語られる所には、少しの夕立にすら名画を濡らさねばならぬやうな粗忽が平気に演じられてゐるのである。

（二）

私は最近百二十一のバラックに対する報告に接した。そして私自身が訪問し視察した結果と内務省や警視庁で聞いた事実とは符合してゐるが、要するにそれらのバラック建築には何等の誠意もなく、夥しく親切さを欠いてゐることを知つたのである。かくも不親切極まる建物がどうしてその中に住む人々に良き感化を与へることができよう。私の恐れることは、昨日今日の寒さに、バラックは摂氏一度半の寒気に襲はれてゐる。そして私は益々このバラックを建てた人々の防寒に対して不注意極まり、不親切極まることを思つて悲しまずにはゐられない。少しもそこに暖かき人格の感化を認めることができない。境遇の支配を恐れるのはそこである。物的境遇の支配は少しも恐るゝに足りないが、その物質の背後に隠された愛の欠乏が、如何に個人の境遇を呪はしきものとすることだらう。物は無心であると思へば大なる間違ひである。すべての人間の精神は木や土を通じて物をいふ。同じ陶器を作るにしても、その法則を守り、その知識を保ち、その親しみを十分に傾けることによつて、ほんとの生命が表はれる。私は世界的の名声を有する陶器工芸家富本憲吉氏と嘗て語つたことを思ひ出す。機械で作つた陶器はなるほど美しい。然し美しいばかりがほんとの芸術ではない。それが皿であつても、茶碗であつても、湯呑であつても、単に機械にかけたばかりでは決してスピリットの這入るものでない。心の行くまゝに親切に土を扱つてこそ、そこにほんとの陶器が生れる。魂のこもつた芸術が現はれる。吾々の求むる文化は、機械で条件づけられるやうな乾燥無味なものではなくて、魂の底から迸る言葉が、土を、木を通じて叫ばれたものであらねばならない。

一つの鉄を鋳るについてもそのことが考へられる。日本の鉄は駄目である。ベスメルの溶鉱炉に入れて造つてもよくない。堅くて優れたスイツツランドの鋼鉄に及びもつかぬ。そして日本では今に、飛行機の材料となり得る良き鉄を自国で造ることができないのである。これは材料が同じでも、スイツツランドの鉄には人間の精神が籠つてゐる。魂が染み着いてゐる。鋳造家が鉄の心を知り尽してゐるからである。これは物理学的な智識によるのではなくして、その性質に通じ得る親しみがあり、職工が鉄の気分と一つになり、溶けゆく鉄をみつめて、最もよき瞬間にマンガンや炭などを入れて鋳型に嵌める事を知つてゐるからである。このことは日本の刀鍛冶についても知る事ができるであらう。世界に於て日本の刀鍛冶の如何に優れてゐるかを吾々は信ずることができる。彼は鉄の性質を本能的に知り、鉄の微分子を思つた通りに打鍛へることができる。あの刀に刻された紋の如何に美はしきか。しかもそれは、刀鍛冶が微分子の活動を本能的に知ることによつて、始めて現すことのできる唯一の技倆であると共に、神仏に誓つて刀を鍛へる彼等の純真な信仰のたまものに外ならない。日本の武士は単に物的な刀を持つのではな

くて、寧ろ名工の魂そのものを持つてゐるやうなものである。

洗錬された紡績の女工は、機械に対して路傍の人ではない。彼女は機械の前に立つて、僅かに一分か二分の間たゞその音響さへ聞いてゐれば、機械のどこに故障があるかを本能的に知ることができるのである。それは極めて微細なる機械と機械の結合されてできたものであるとはいへ、彼女はその局部々々の傷みを徹底的に知ることが出来る、この親愛なる機械との繋がりこそは、やがて機械の成長となるのではないか。

（三）

機械の成長は発明である。機械に共鳴し、機械が成長し延び上らうとすることを直感する所に発明の道が開かれる。それが蒸気の利用となり、電信、電話の発明となつたのである。人間の周囲の物質は、これらのことから考へて見ると、それは単なる物質といふ非人格的なものでは決してない。たとへば土についてその例を見る。土は人間にとつて如何に親しいものであるか。土には人格なしなどと考へる者が仮にもゐるとすれば、それは大なる誤りである。

百姓の話によると、若し土地を一年間も耕作しないで放棄するならば、一度荒された土に新しい力を盛り返させるに、実に七年もかかるといふ。土に対する僅かの親切の足りなさは、ひどい反逆を見せられることになる。ちよいと怠ける時には、稲でも麦でもすぐ雑草に取り囲まれて手のつけようがなくなる。土は決して黙つてゐない。土はすぐ物をいふ。

歴史的な土の反逆は、吾々はこれを支那の文明、並にチグリス、ユウフラテスの文明に辿ることができる。支那は黄河揚子江の二大河を擁してゐる国であるが、彼等はこの二つの河を愛することを知らなかつた国民である。為政者は百姓を顧みず、百姓はその流域の樹木を悉く伐つてしまつた。支那の大半を蔽つた豊饒な沃土は、やがて容赦なく下流へ流失してしまはねばならなかつた。何処の土地でも、地上の二尺ぐらゐは大抵沃土である。しかるに黄河と揚子江の流域は、その肥えたる土を殆んど失つてしまつてゐる。土はやがて愛の足りない政治家にも百姓にも報復した。洪水と飢饉は絶えずこれ等の河の流域を襲ひ支那の文明はそのためにどんなに荒されたことであらう。一旦人間が土を離れたならば、土はなか〳〵人間には帰つてくれない。かくてエジプトが亡び、バビロンが亡びてしまつたではないか。

人間の親切の足りなさに反逆するものは土ばかりではない。一つのバラックを見ても、一つの椅子を見ても、一つの石を見ても、それは決して人間の精神生活と無縁のものではない。一枚の着物、布端にだつて、精神は隠されてゐるのである。そして不親切な人間の遺して行つた後には、何をおいてもきつと反逆が現はれる。

バラックの場合がそれである。たとへ設計家が親切であつても、建築家が不親切であるならば、吾々はそこに何のよき効果も認めることができぬ。微妙な人格の関係が如何に苛辣に働くことであらう。

使徒行伝を読むと、使徒ペテロが附けた着物の類を病人に触れさせると病気が癒えたとある。ペテロの魂がその着物にまで移されてゐたことを語るものではないか。

さて考へて見ると、東京には高き信仰を中心とした建物が殆んど見出せない。ライトの建築の尊さは、ライトがその建物に、その木に、その土に、彼の魂を打込んだ所にある。帝国ホテルや自由学園に於て見出される一種特別な落着きこそは、吾々がライトの魂そのものに直ちに親しみを感ずることができるからである。若しバラックが言葉を発するならば、それはもつとも乱暴な言葉を選ぶであらう。少しの親切気もない無頼漢のやうな叫びをあげるであらう。今の東京市のバラックには、百三十人がたゞ一つの便所しかない割合を示している。百三十人がたゞ一つの便所しかなくふこの一例を以てしても、如何にそれは不親切極まるものであるかを知ることができる。こんなバラックでは、やがて蝶番が飛び、屋根と壁との間に一寸位の隙間が生じて来る。罹災者を救ふためのそれではなくて、まるで早く出てもらひたいためのバラックとしか考へられない。私は新宿御苑のバラックを視察して来たが、あすこの九間に三十間のバラックには、いろんな悪臭がたてこめて、五分間と我慢がならない不潔さである。どこに文明人の住宅の面影があるのか。そこに三ケ月、六ケ月と過さねばならぬ罹災者の悲惨さが思ひやられるではないか。これは最も不愉快な精神に左右された社会的境遇の一つの表はれといふことができるであらう。

（四）

日本の家屋は仏教の精神が移されて作られた居間が多いのである。玄関、四畳半、書院、雪隠――それらは凡て禅の言葉から出てゐる名称である。仏教の精神が住宅を支配してそこに床の間ができ、茶の間ができたのである。然るに近代の皮相なる感覚的若しくは官能的文化は、その本質的精神を失つて、玄関にしろ、床の間にしろ、茶の間にしろ、雪隠にしろ、みんなその由つて来る真の意義を失つて、今では壁でも柱でも物をいはなくなつて了つた。科学的に考へれば、家は環境に支配されるものであることを知る。然しそれは通常に考へられたる如く、単に生理的にのみ支配されるものとは決して思ひたくないのである。人はパンのみにて生きるものに非ずとキリストはいつた。住宅についても、よく深く心理的に支配されることを私は力説したいのである。吾々は十二若しくは十三の感覚を持つてゐる。目、耳、口、鼻、触覚、苦痛覚、運動覚、饑餓覚、色覚、温覚、冷覚等、みなそれ〴〵違つた感覚を持つてゐることを思へば、人は決して一つの口のみによつて生活するものでないことは、容易に知ることができる。この点からかんがへても、人格的生活とは心理的生活である。

住宅の感化は生理的感化よりも心理的感化にあることはいふまでもない。それは吾々が寺院に行き、大なる伽藍を訪ね、神社に行つた時に解る。寺や神社と普通の住宅とは、心持の上からでも大変な相違のあることを知る。世の常の住宅は金儲けの目的を中心としたものであるが、神社や寺や教会は、美と神への憧れ、真理への思慕、犠牲奉仕の精神の現れとして建てられたものであるから、その感化は自ら精神的である。所謂物質は決して心を離れては存在しない。物質の形を通して精神が語るのである。貧民窟に於ける境遇の感化の恐ろしさは、単にそこに住む人達の性質が悪いといふばかりではない。家、衣服、食物が、すべて親切や注意に触れないで、遣りつ

放しであり、胡魔化しである。かゝる境遇に育てられた者は、どうして人間の温い心持を支へることができようか。手をこめないで、たゞ機械的にアリニンで染めたものは、すぐ赤ちやけて来る。瞞されたことが一遍に解る。文明が剝げて来るのだ。少しの根も張つてゐないのだ。吾々の求むる真の境遇は、人格的表現の堆積されたものであらねばならぬ。煉瓦は上に上にと積み上げられる。その上に新しい時代が表はれる。然し前人の遺した物質が人格的でなければ、下積みはすぐ反逆するであらう。そこに資本主義文化を吾々は認めるのである。

一人の子供の周囲に煙草と煙管と阿片を飲む器具とが置かれてゐるとする。子供は始めそれらに就ての何の知識をも持つてゐない。しかし子供はその成長と共に、自分の周囲に置かれたこれらの物に興味を持ち出すであらう。そして段々人格的な感化や影響を受けるやうになる。一人の母から子供に着物を遺されるとする。その母の心持によつて、いろんな着物が遺されるであらう。色彩でも模様でも、母に依つて色々な違つた着物が贈られることになる。落着いた母は、澄み切つた色彩のもの、華美好きの母は、けば〳〵しい赤の勝つたもの、ごまかしの心に捉はれてゐる母は特別なまやかしの色に染めた娼妓の裲襠のやうなモスリンの着物を遺すであらう。文芸復興期の建築が後世に遺したものは、殆んど胡魔化しのものであつたことを悔ゐねばならないやうに、まやかしの心を持つてゐる母の精神は、着物を通じてすらその子に伝へられる場合がある。私はどん底生活を長く送つて、親が子に伝へる恐るべき人格的影響を深く感じたのである。

大阪の商人は非常に評判が悪い。早く儲けたいと思つて胡魔化しをやる。材料がそんなに悪いのではないが、精神がいけないものだから、作つた機械にすぐ狂ひが生ずる。機械の精神は極めて鋭敏である。大抵の機械は一日手入を怠ると、三十日位敏活に動かなくなる。殊に微細な機械になると、少しの錆で、もういふことを聞かなくなる。こんな機械で、こんな心持で作つたメリヤスなんかはちよつと着たばかりですぐ役に立たなくなつてしまふ。大阪の商品の悪いのは、それを作る者の人格の中に大なる欠陥を持つてゐるからである。

綾部郡是製糸会社の創設者波多野鶴吉氏の作る生糸は世界に於て最も優れた生糸である。それは蚕がいゝからである。何故蚕がいゝかといふに、波多野氏は蚕を自分の子供だと思つて育てる。子供に乳を呑ませるやうな心持で蚕を飼ふ。だから郡是製糸の蚕はいつも健康である。弱つてゐないからその吐く糸は一様のものを出す。弱つた蚕の吐く糸には太さ細さの斑があつて、どうしてもよき生糸を得ることができない。人格の感化が物質に及び、物質が我々に物をいふことを、波多野氏の生糸の場合でも知ることができるのである。

（五）

境遇のさま〴〵の変化によつて、或は最低生活にゐなければならぬ時でも、そこに人格がこもりさへすれば、吾々の生活に生命を見出すことができる。禅寺に行くと、極くつまらぬ茶碗でも磨かれて透き通つた玉のやうに見える。古い時代の茶器でも、少し高踏的な例ではあるが、古人のかうした器物に対する親切と行き届いた注意

とを十分知ることができ、そこに吾々は彼等の人格を偲ぶことができるばかりでなく、その器物に対して随分な高価をも惜しまなくなるのである。

真の文化とは日常の生活に人格を完全に表現するの生活であらねばならぬ。これを一家の主婦に見るも、多くの使用人にのみ凡てを委せて、自分が一つも手を下さぬやうでは、少しも表現的な生活ではない。たとへ自分は四畳半のやうな小さい部屋にゐるとも、その装飾、その器物、その家具、すべて自分の目的を表現する道具として使ふならば、そこに人格を活かす文化生活を見ることができるのである。そしてそれこそ、その人にとつての自由でもある。人の模倣ではない。人ばかりを使ふのではない。人格の最も自由な表現の境地こそ、真の文化の頂上である。徒らに人を拘束し、拘束した人の作つた機械の奴隷となつて自由を失はせられた場合に、吾々はどうして喜ばしき生活を見出すことができよう。然し不幸にも現代の社会はかうした資本主義文明の不幸に繋がれ、多数の労働階級は拘束され、僅かに少数者のみがその生産のおかげで非人格的な偸安的な生活を送る社会を、どうして愉快だといふことができよう。吾々は進んで愉快な社会を求め、機械を通じて喜ばしき人格を表現せんがために、悲しめる鬼を励ましてこの境遇に甘んじない人格を樹立しなければならぬ。

（六）

私は嘗て朝鮮へ行き、あの低くしてむさくるしい民家を見た時に、あのオンドルの入つた惨めな家々を見た時に、朝鮮に文化の起らないのは当然だと思つた。その後徳富蘇峯氏に会つた時、私は氏にそのことを語つたのである。所が蘇峯氏の私に対する答へはまるで反対であつた。蘇峯氏の説によると、朝鮮にこそ立派な文化はあつたのである。日本の徳川時代の文化の大半は悉く朝鮮から移入されたものであつた。それを現代の日本人は、朝鮮の小さい民家を見て軽蔑するのみで、その民家の陰に隠されてゐる歴史的な朝鮮の文化に気づかないでゐる。そこに朝鮮に対する日本の統治の大なる欠点がある——さう蘇峯氏は云はれたが、なるほど考へて見ると、朝鮮人のすなほの心、白衣の洗濯を好む心、身のまはりを清潔にすることを好むその性質等は、あの陋屋に隠された朝鮮人のうるはしい文化の面影である。彼等の住宅はたとへ拙くとも、拙いながら利用して、そこに彼等の精神を光らせてゐるのである。

バラックに就ても同じことが考へられる。たとへその家屋が小さくとも、親切や注意が行き届いてゐるならば、もつと精神的な暖かい住宅が見られた筈である。薔薇には棘がある。棘は古き植物に見出すことはできない。多分最小動物が地上に表れてから、植物は棘の必要を感じはじめたものと見える。葉が落ちて、残つた葉柄の部分が棘となるのだが、美しき薔薇にすら棘を持つといふことは、その周囲にこれを食ひ荒さうとする動物のゐることを示してゐるのである。桜は薔薇の種類で、始めはやはり棘があつた。然しそれは今は桜の幹の目と変つてゐる。周囲の事情が強い感化を与へて行くからである。若し世界が愛にのみ充たされてゐるならば、棘はこの世からだん〳〵なくなるであらう。バーバンクと云ふ博物学者は、覇王樹の棘をみんな取つてしまつてその生育を験したことがあつた。

周囲がほんとに愛にのみ充たされてゐるならば、薔薇でも覇王樹でも棘をなくして了ふだらう。然しその周囲が飽くまで不親切であり、これに迫害を加へる時は、彼等は決して棘を取らないであらう。然しながら吾々はかうした境遇の中にあつて、内なる信仰と人格とを表現して、外なる物質を支配することを常に心にとめなければならぬ。

日本の文化は古人の残してくれた残パンであるかも知れない。吾吾はたゞその残パンを受けつぐならば迷惑を感ずるのみである。その残パンを消化して十分に活かしきる意気が必要である。尾籠な話ではあるが、かの糞虫（ケフケフオーム）は、自分の食つた土を一つの穴へ持つて行く。するとその糞はセメントの如くなつて穴の周壁に塗りかためられる。かうして出来た穴には水などの入る心配はない。糞虫は安心してその穴に卵を産みつけることができるのである。吾々の表現の道は多様であるけれども、然し吾々は自分の境遇を支配して、物的力に圧倒されず、そこに新しい創造的な精神生活の頂点を、常に把持してゐたいものである。

建築は一つの言葉である

（一）

私が東京に来て最も不愉快に感ずることは、震災救護事務局の人人がバラックを建てる際に、細民住宅に関する心理を全く無視したと云ふことである。

今日のバラックは、昔のトンネル長屋以上である。昨夜（大正十二年十一月二十二日）も私は新宿御苑のバラックを見て廻つた。そして驚いて了つた。それは、間口九間奥行三十間もあらうと思はれる倉庫式のものであつて、中央にトンネル式の道路があり、その両側に四間幅の床が張られてあつた。然し、そこは一家族が占領するにはあまり広過ぎると云ふ理由で、中途で区切つて二家族が這入つて居るのであつた。その区切も、板であるものは少なく、多くは三尺位の幕とか、布片で作つてあつた。通風が悪いので、臭気が鼻をつくと云ふ有様である。あれでは、もと本所あたりにあつたトンネル長屋よりも遥かに粗悪なものである。

御苑の中に、よくもこの種類のものが建てられたものだと私自身驚いて了つたことであつたが、万事がこの流儀である。

私は復興院に於ける細民住宅の設計に就て如何なる事が進行してゐるか知らない。噂に聞けば、池田計画課長は細民住宅として六畳一間は広過ぎると云はれたとかであるが、私としては、池田氏が細民心理を知らないことを尤もだとは思ふが、そのあまりに思ひやりの少ないのに驚いて居るのである。

私は細民窟に数十年住んで見た経験上、建築家が材料とその与へられた条件にあまりに縛られて、その中に住む人間に対する心理的反影を考へて呉れないことを悲しく思ふ。

（二）

建築は一つの言葉である。

粗悪なる良心の持主はその建築を通して粗悪なる言葉を物語る。